

第13回日本体験コンテストin大韓民国

入賞者企画実施報告書

テーマ「日本で体験したいこと」

①金^{キム} 美辰^{ミジン}（釜山大学校統計学科）

テ ー マ：雪国、水晶のように清らかで透明なお酒の本場

活動内容：酒造見学・利き酒体験 など

主な訪問先：新潟

実施報告書：[【PDF】](#)



越後湯沢で利き酒体験

②金^{キム} 映美^{ヨンミ}（韓国芸術綜合学校芸術経営科）

テ ー マ：未来の女優さん、‘ありえないじゃない’ プロジェクト！

活動内容：大学演劇サークル公演見学・ミュージカル見学・

劇団オーディション、ミーティング参加 など

主な訪問先：東京

実施報告書：[【PDF】](#)



劇団四季

③金^{キム} イスル（東国大学校観光レジャー経営学科）

テ ー マ：人+木=休、人と木が共存する休の島「屋久島エコツアー」

活動内容：屋久島エコツアー体験・屋久島環境文化センター見学 など

主な訪問先：屋久島

実施報告書：[【PDF】](#)



ウィルソン株

④林^{リン} 允熙^{ユンヒ}（高麗大学校メディア学部）

テ ー マ：日本の「ソフトパワー」は、これから世界をリードできるのか？
～東京国際映画祭を中心とした「韓流」と「日流」の比較分析～

活動内容：東京国際映画祭見学・東映アニメーションギャラリー見学・
ジブリ美術館見学・映画村見学 など

主な訪問先：東京・大分

実施報告書：[【PDF】](#)



三鷹の森ジブリ美術館

⑤金^{キム} 帝坤^{ジェゴン}（東国大学校 映像大学院文化コンテンツ学科）

テ ー マ：日本映画の静かな原動力、ミニシアターを巡る紀行

活動内容：ミニシアター見学・映画作品見学 など

主な訪問先：東京・大阪

実施報告書：[【PDF】](#)



イメージフォーラム前

1. 種類豊か、地方を代表する日本酒が**気**になる！

日本のお酒と始めてあったのは大学二年生の時、**教授と一緒に**行った居酒屋でだった。みんなが嫌がる**教授**との酒席だったが、私は居酒屋が初めてだったので結構楽しんでた。**当時韓国で焼酎とビール、マッコリ以外のアルコールは飲んだことがなかった**私は、日本酒は日本のアルコールだという考えだけを持っていた。**教授はビールもマッコリも好き**だけど、日本酒は**飲んだ次の日二日酔いにならないとおっしゃった**。それを聞いて、みんながごくごく**飲んで**しまっ**て、酔っ払い**になった記憶がある。それ以来、また日本酒とあったのは日本のホテルでだった。私はバイトでホテルのレストランのサービスをしていた。そこで自然と日本のアルコールを詳しく知ることが**出来た**。私はアルコールの種類の豊かさへ驚いた。また、**飲む方法**にも人それぞれの趣向があることに面白さを感じた。その中、もっとも私が興味を持ったのは日本の地酒だった、日本では地酒という、その地方だけのお酒が存在した。ホテルのお客でも、地酒を**頼む人**は非常におおかった。私はその面を注目して、日本のお酒、特に日本酒について、もっと考えを深めたかったので、作文の主題とすることになった。

2. なぜ、新潟なのか？

一つ目は、新潟で色々なお酒を味わうことが**出来た**からだ。新潟のスキー場で**働いた時、一緒に働いた人**たちから色々なお酒について**教わった**。その記憶で、日本のお酒といたら新潟のお酒を思うようになった。
二つ目は、新潟にはお酒をかもす**酒蔵**が100場所に至る。一つの県でこれだけの**酒蔵**があるということは珍しいと思った。その100場所に至る**酒蔵**は、どんな**経営**をしていて、どんな力をもっているのかが**気**になった。
三つ目は、新潟の環境だ。お酒の味を決めるのは水と米だ。新潟の水は軟水で、この軟水はお酒の味をやわらかく、まろやかにしてくれる。そして冬は**気温差**がすくないから、仕**込**まれたお酒はきめ細やかになる。酒米としては、甘みがあって香りがいい新潟産コシヒカリを使っている。酒造りの**最強**の環境を持っているからこそ、新潟に行くべきではないかと思った。

3. 酒蔵めぐり

* 柏露酒造

柏露酒造に行った日は雨が降る日だった。この日は酒造の予約をちょっと**遅**めにしたので、マリニピア水族館を訪ねることにした。色々なショーが時間おきに行われたので面白いのをたくさん見ることが**出来た**。その後、雨が降る中、相露酒造を探すのは大**変**だった。入り口がどこかわからなくて、最初は違うところに行ってしまったり、場所を探して行っても迎えの人が**来**なくて外ですっ**と**待っていたりして大**変**だった。やっと**酒蔵**に着いて、初めは柏露酒造で作るお酒は、どんな工程で作られるのかを**説明**するビデオを見た。そん

なに大きい酒蔵ではないと思ったが、自分たちがお酒を作る姿のビデオまで用意していることに驚いた。その後は、ビデオで見た工程を直接見ることも出来た。ここは他のところと違う方法で発酵をする特徴があるところだった。客が私一人なのにもかかわらず、責任者の方は一所懸命説明してくださった。最後は酒蔵自慢のお酒を味わって見ることができた。特に私が気に入ったのは女性向けの白桃だった。コラーゲンが入っていて、桃の味がして美味しかった。お気に入りだったので、一ビン買って来た。

この酒造で私が感じたのは、その酒蔵なりに独特な方法を見つけて発展するから、色々な酒蔵がある中、続けていけたのではないかというのだ。そして、一人だった私にも必死に自分らのお酒を紹介する気持ちがあるから、人々は感動を感じてこのお酒を愛用することもありうるのだと思った。

* 北雪酒造

北摂酒造は佐渡という島に位置している。行く時、船酔いのせいで具合がよくなかった。ホテルについてちょっと休んでから酒造へ行った。私はここで俺の酒という、自分の名前を入れたお酒を買うつもりだったけど、それをつくってくれる担当者がいなかったの、そこで一番売れてるという梅酒を買って来た。

ちなみに、せっかく佐渡に行ったので佐渡金山に行ってきた。昔の佐渡金山を再現する人形が、本当の人間みたいで驚いた。

* カーブドッチワイナリー

ただワイナリーだけがいると思った私は、着いてビックリした。なぜなら、そこはホテル、レストラン、パン屋など色々な建物があつたからだ。ホテルもここに予約したら最高だったと思う。責任者の方から、ワインの元になる、ぶどうを直接育てている場所を見せてもらった。ぶどう農場で栽培しているから、いい質のワインを作るのはできるが、お金にはならないということを聞いた。責任者の方は、そのお金の調達するために、ホテルとかレストランを作ることになったと言った。そこで、ワインを愛する気持ちがよく伝わってきた。お金にはならない事業だが、ぶどうを直接栽培しながら、いい質のワインを作るのに、どれぐらい真剣な気持ちをもっているのかがよくわかった。

経営する人が商品に愛を持っているから、このワイナリーはもっと発展するだろうなと思った。

* 越後のお酒ミュージアム' ぼんしゅ館'

ぼんしゅ館は前、新潟にいた時、その周りには行ったことがある所だった。でもぼんしゅ館の存在には気づかず、周りの食堂とか特産物を売っている屋台だけを見ただけだった。今度はその特産物を売ってるところでも、お酒を利用した面白い商品に注目した。そこで私はお酒を使用したチョコレートやパンなどをみてさすがだと思った。お酒が好きな人はもちろんお酒を買いにここへ来ると思うけど、好きではない人も楽しめる商品を用意しているなんて、素晴らしいと思った。その後、ぼんしゅ館に入ったら、面白い酔っ払いマネ

キンが倒れたりしていた。あと、壁の一面が全部お酒を味わえる所だった。色々な種類のお酒を味わえることが出来る事に、興奮していたせいか、大きなミスを起こしてしまった。お酒があまり強くないのにいきなり飲んでしまって、酒風呂の温泉に行くのが出来ない状態になった。顔が真っ赤になって、まずはちょっと休んだほうがいいと思って、旅館の人に迎えを頼んだ。

4. 終わりに

旅行を企画した時、ホームページをみて、自分たちのお酒を広く知らせるため、努力している姿を見て、感心していたのを思い出す。実際訪ねてみた新潟県の酒蔵は、感動的なものだった。みんなが自分たちのお酒に自身を持っていたし、常にお客の立場を考えている動きをしていた。女の子向けもコラーゲン入りのお酒を造ってみたり、名前入りの自分だけのお酒をつくったり、お酒が苦手な人も楽しめる商品をつくったりして、どんな年齢の人でも、一回買ってみたいと思わせている。そこに、日本らしいさが加えているのが今回の旅行の楽しいところだった。酔っ払いマネキンとかもそうだったけど、私がこの旅を楽しむことが出来た一番の理由は、酒蔵の人たちの親切な待遇であった。一人で行っても丁寧に、面白くしろくしてくれた、酒蔵の人たちのおかげで、面白い経験もたくさんしたと思う。お酒の専門単語がよくわからない私のため、説明が長くなってしまうのにもかかわらず、親切にしてくれたのは多分ずっと記憶に残ると思う。一人で旅をしてからこそ、日本のお酒、そしてそれを作る人たちの熱情についてもっと深く考えることが出来たと思う。

未来の女優さん、'ありえないじゃない' プロジェクト！

キム ヨンミ

はじめまして。

私は韓国の俳優'キムヨンミ'です。かなり有名な女優だから、知っているんでしょう。韓国の作品だけではなく日本の作品もずっとやっているから。今年(2015年)は韓国と日本のたくさんの方の俳優たちがスペシャルコラボレーションを計画しています。初めは東京で撮影です。ほんとうに楽しみです。

私はこんなかわいい希望のうそで始まる計画書で国立国際交流奨学財団の『第13回 日本体験コンテストin大韓民国』に合格、日本に行ってきました。2010年 12月 9日から24日まで東京へ行って17篇の公演をみて、15回のオーディション ミーティングをして戻りました。到着した日の初めにみた公演から涙を流し始めた、ほんとにたくさんを経験して学んだ長い旅程でした。不足な文才で全部表現することができないと思いますが、その日々をありありと書いて見ようと思います。

14歳の時日本の伝統公演をみて'言語が分からなくても文化は伝わるんだ！'と考えて俳優という夢を描き始めましたが、私は実はいわゆる名門大に入って勉強したんです。しかし学校をやめて演劇学科に編入したんですが、大学で一緒に演劇を勉強して作品をしたことが本当に楽しかったんで、私みたいな日本の学生たちの作品があまりにも見たかったんです。日本大学芸術学部の日舞卒業制作「かるてつと」は日本舞踊を初めて見るにも本当に美しかったし、2年生の舞台総合実習「上野動物園再々々襲撃」を見ながら私の学生時代を思い浮かぶことができました。演劇卒業制作の(演劇)「テイク・ザ・マネー・アンド・ラン」のパンフレットにはこれからもずっと俳優をめざすという学生の言葉もあったけど、生活を考え内定をもらってこれが最後の舞台だという学生もあって、韓国と同じだねと思いました。すべて良かったが、特に記憶に残ったのは意外に高校の卒業公演だったんです。東京へ到着した日、時間をまちがって翌日の横浜の明治学院大学演劇研究部と変えて、渋谷の関東国際高等学校の卒業公演『ユメミザクラの木の下で』をやっと見たんですが、演劇も始める前、私はパンフレットの演出の言葉を読んで涙が出てしまいました。そこには『演劇人に不可能はない』と書いてありました！少しは下手な演技だったけど、私はどんな公演よりも彼らの熱情を十分感じたんです。涙が出るように努力した演習の過程が目に見えるようだったんです。それは私の初心を浮き出してくれました。

明治学院大学演劇研究部の「声をなくした三日間」、立教大学の劇団テアトルジュンヌ「傍らに、無きが如し」などのいろんな大学の演劇サークルの公演も見たんですけど、早稲田大学演劇研究会の『犬と串 case5-ZOMBIE』は日本語を100%理解することができなかったのが悔しいぐらいおもしろかったんです。韓国の観客も好きそうな演劇なので、いつか以前のシリーズを含めて必ずまた見たかったんです。公演が終わって俳優さんたちと写真を撮ってすこし話しましたが、この公演はオリジナルで、シリーズをずっと見る観客さんたちがいるそうでした。未熟な日本語なのに俳優という同じ事をしているからか、作品の話と韓国の今流行ってる公演など結構真摯な話もすることができました。本当に日本の俳優さんたちと現場で会いたいなと思いました。

マンマミーア、キャッツ、ライオンキングなどの劇団四季のミュージカルと宝塚などの有名な公演も見たんです。まず規模から感嘆したし、俳優さんたちのしぐさと技術がすごかったです。そのとき一番話題になっている公演である本多劇場の「大人計画-母を逃がす」、蜷川幸雄演出の「美しきものの伝説」は、俳優として私が今ここでこの公演を見られるということに感謝した作品でした。俳優さんたちがしようとする言葉が心に伝わった公演でした。都心の中に建てられて

有名な世田谷パブリックシアターで公演を二篇見たんですが、その中『春琴』が印象的だったんです。日本の伝統と現代のスタイルがとてもよく調和した演出だと考えたんです。舞台も照明もシンプルな中、黒い服のアンサンブルをする俳優さんたちがたたみと長い棒を使って、道を作って、門を作って、屋根を作りました。そのシンプルな演出の中、俳優さんたちの芝居が輝いて、かなり大きい劇場だったのにそのエネルギーがすべて伝わりました。

公演を見ること以外にも、大事な出会いが多かったです。演劇学科を卒業して俳優を続けるのが手に余った頃、扉座とゆう日本の劇団が韓国での公演のヒロインを探すオーディションに参加し落ちたんですが、最後の候補だったのをきっかけでもう一度勇気を出した事があります。私は結果に関係なく、楽しくオーディションを準備する間、力づけになったかも知れないです。日本でもそうでした。直接日本語で自分の紹介を書いてプロフィールを作りました。Kenon、Papado、Stardust、Horipro、劇団四季を含め15箇所の劇団と演藝事務所へ行きました。10箇所などの映畫製作社へは郵便でプロフィールを送りました。住所と地図を見て捜し回るのが難しかったんですが、笑いがこぼれおちった日々でした。あらかじめミーティングの約束をすることができなかった所もあったから心配したが、担当する方々はみんないろんなことを問って優しくしてくれました。準備した短いモノログと日本の歌を歌ったりしたんです。ただプロフィールだけを差し上げた事務所でも、韓国から来たということに"頑張ってください"を叫んでくれました。そして運が良いことに、ある映畫社からはいつか日本にまた来たら製作する映画に参加すれば良いという返事をもらったんです。

日本と韓国の公演の世界には同じも違いもあったんです。16日間の夢みたいな旅程をうまく表現するのはやっぱり難しいですが、ひとつだけは確かに分かるようになりました。今この瞬間にも韓国のどこか、日本のどこか、世界のどこかでは俳優たちが一生懸命演習をして、公演をして、作品を作っていたということです。その俳優たちに負けないように、いつか同じ現場で会うため、私も自分の場所で楽しく行こうと思いました。そして日本の文化に関心を持って直接経験した人として、これからもっと日本と交流することができるようにと願っています。残念だったのは、韓国でインターネットの調査の限界のせいで、小さくて知られていないため良い公演をたくさん見られなかったということです。公演を見る度に他の公演のちらしをたくさんもらったんです。日程に行き違いで見られなかったが、ほんとうに見たかった演劇が多かったです。公演でみんなアンケートをするのも次の公演のため本当に良いアイディアだと思って、私も下手な日本語でも書きました。今もメールで新作のニュースを受けてるんです。それで1年に一回ぐらひは日本へ公演を見に行くつもりです。俳優として経験が多くなるほど毎年感じることも変わるはずなので、今から楽しみです。

私は計画書の終わりにも希望のうそを書いたんです。コンテストに合格、日本での経験が力になって韓国に帰って参加した映画オーディションに合格したって。そして、奇蹟が起き、ooo事務所から連絡が来て、デビュー準備を始めることになりましたって。ところで本当に実現しています。扉座の演出家の横内先生に板橋で会って日本の公演の現況について詳しく説明してくださいましたが、先生の'はかな'という作品を韓国のどこかの劇団が公演するようになって、1月、先生が韓国へいらっしゃってたくさんの俳優さんたちと会える機会もありました。東京でもともと計画した横浜国立大学の唐十郎先生に会えなかったけど、知り合いのおかげで日本の劇団である新宿梁山泊の来韓公演の仕事をスタッフとして手伝っているんです。ほとんど30人の俳優、スタッフさんたちと一緒にしているけど、毎日がとても楽しいんです。日本での経験からもらった気運のおかげです。そして、デビューもしました！去年に受けた『ミスターチルドレン』という映画のオーディションに合格して、日本の観光客のガイドの役で映画を撮影しました。小さな役だったけど、私、はじめての映画でのせりふが日本語だったんです。今年の7月には演劇デビューもします。日本の作品である『四谷怪談』です。日本の作品をするところにあたって、日本で公演を見たことは本当に役に立つと思います。不思議ですが、たぶん全部日本での体験からの力ではないかなと思います。このような機会を下さった共立国際交流奨学財団に心から感謝いたします。未来の女優としてほんとに'ありえないじゃない'プロジェクトになったんです。こ

の経験からのことをぜひ、俳優として私の演技に浮かべたいんです。韓国と日本の演劇、映画にもっと多い交流があるため、この経験が無駄にならないように、今からもずっと関心を持って行きたいと思います。

「人+木=休、人と木が共存する休の島 屋久島エコツアー」

金イスル

1993年、日本最初で世界自然遺産に登録されて「東洋のガラパゴス」と呼ばれる九州南端の小さな島「屋久島」。日本では最高のトレッキングコースで定評があるが韓国人には良く知らない所である。太古の自然の姿をそのまま保存して言葉で表現できないほど素敵な山があって年間、訪問客の数がだんだん増えてる島だ。このように屋久島へ次々観光客が訪問する理由は人と木が一緒に共存しながら二つの存在が平等に休を追い求められるわけだと思う。一般的に「休」と言うのは人が中心になって「木の下で休む」意味である。けれども地球に生きている生物は皆、同等な存在なので「休」の意味を平等に使わないとならない。このような考えを持っている所が屋久島である。さらに屋久島ではすべての生物が神聖な存在で思われている。一例でこの島では住民たちだけでなく観光客たちにも必ず守らなければならない「屋久島カントリーコード」という規則がある。

普段、こういう自然と環境に関してとっても興味が有ったので今回の「日本体験コンテスト」こそ日本で私の夢を実現することができる極めて「良いチャンス」だと思った。そういうわけで日本体験のテーマを屋久島で、誰でもする旅行ではなく木とともに自然の一部になる「屋久島エコツアー」に決めた。旅行は苔の緑と様々な植物の紅葉を見られる秋、11月10日から17日まで8日間の体験だった。

島国の島、世界自然遺産である屋久島に会う

屋久島では17世紀から杉を利用した林業が盛んだった。そうだからヤクスギが経済と文化に影響を及ぼした。しかし大規模伐木によって山林資源の枯渇と木材需要の減少で伐木が全面禁止された後、1993年屋久島は世界自然遺産に登録された。あれから屋久島は人と木が共存する環境文化の島になった。こういう歴史と世界遺産の名前を持っている島だと聞いたからこそ訪う事さえ易しくなかった。普段、日本人にとっても一度行くのが難しくて行ったことがある人はなかなか珍しいらしい。そのはずなのが私も飛行機と新幹線そして舟まで乗って屋久島に到着したわけだった。最初から飛行機で鹿児島に行ってまた飛行機で屋久島まで行けば良かったが私はそうしなかった。環境的に飛行機が一番多い汚染物質を発生させる乗り物だと聞いたし少し苦勞をしてもなるべくエコツアーをしたかった。

かくして出会った屋久島は旅程の間に想像したイメージよりずっと素敵な姿で私を待っていた。ただに小さな島ではない、まことに世界自然遺産の名誉を持つて名所だった。そのような気分を満喫しながら島の情報をもっと知るために「屋久島環境文化センター」に向かった。私は企画どおり自然の一部になりたかったのでこの島で泊まる場所も何も予約しなくて行った。それを少し心配していたが「屋久島環境文化センター」へ入った瞬間から先の心配は余計なことだった。外国の女の子一人で来たことが面白いことだったのかセンターの人々とすぐ親しくなって泊まる所や明日の山登りコースなど色んな情報を貰うことになった。

島国の島、屋久島に会いに行くのは大変だったがもしこんなに美しくて情け深い所を誰でも易しく訪れる島だったら出会った時の感動は少なかったかも知れない。

生きている歴史、縄文杉に会う

「金さん!もう4時ですよ。起きましたか?金さん~」。夜明け4時、登山の日程があったので泊まっている民

宿のやどさんが私のためにわざわざ起こしてくださった。やっと目が覚めてバスの時間に間に合わせるために準備を急いだ。昨日予約しといたお弁当を買って縄文杉に会える荒川登山口までバスで行った。韓国のように普通、登山口の前で駐車してそこから登ることはできず、ほとんどバスで登山口まで行ってトレッキングをするべきだった。それほど自然を守ってる努力が見えてなんだか楽に旅行しようとした自分を反省するようになった。元通りなら淀川登山口からトレッキングを始めて最後は荒川登山口まで行くコースだったが先日、センターの皆さんに女の子一人ではかなり危険性があると言われて悩んだ。その結果、荒川登山口から始める10時間コースを選んだ。先のコースだったら頂上まで行って屋久島の全体を見るつもりだったけど普段登山が得意な人でもガイドさんがいなければ無理だし厳しいコースだと聞いた。しかも今年、宮之浦岳まで行った登山客の中で3人が失踪されたという話を聞いて仕方なく次善の経路を選択したわけだ。

いよいよ縄文杉に会う旅が始まった。朝6時、まだ周りが暗くて怖かったので他の登山客達と一緒に歩いた。ヤクスギ鉄路に沿って上がりながら本格的に屋久島エコツアーの企画を考えた。きれいな空気や素敵な景色など絶対に来て見なければ分からないことを感じる途中に緑色の車が通り過ぎた。それは昔に屋久島の杉を運搬したもので今は山の保守をする時や工事の装備を運ぶ移動手段になった。かわいい汽車だと思ったが島の歴史を思い浮かぶと複雑な気持ちに包まれた。あちこちを見ている間に「縄文杉・ウイルソン株」を示す立て札が出た。まだ1時間半ぐらい登ったがなんだかもうすぐ縄文杉に会える気がした。

さて、一人で山登りをするのはいろいろ面白い体験になると思う。さらに外国ではもっとそうだと思うし山でしかできない出会いとか他の人々に自然に声をかけてみんな親しくなる不思議な経験ができるからだ。私も登りながら見知らぬ人たちと何度も挨拶したり会話したりして全然寂しくなかった。その中で一番多く言われた言葉は「一人かい?」だった。見かけが日本人のように見えたのかみんな普通に日本語で声をかけて「一人で偉いね」とか「寂しくないの?」とか励ましてくれた。普段、韓国人より優しいイメージを持っている日本人であるからなのか屋久島の人には特にもっと親切だった。

いくらほど歩いて来たのかいつの間に鉄路が終わって厳しいトレッキングが始まった。今からは険しい傾斜と岩で覆わせた山を登らなければならない。あらためて縄文杉に会う道は決して単純な旅程ではないことを悟った。もう一度、気合いを入れてウイルソン株で向けた。同行した人やガイドさんがいなかったから一人で考える時間が多かった。そのためか屋久島のことをもっと思ったかもしれない。山を成している木と苔、そしてすべての生物たちの生命を感じながら「この世の中では人が主人だ」と言う人間中心的な思考は間違っていたというのをその時はっきりと学んだ。

もう縄文杉かなと思った時、アメリカのウイルソン博士の名前が付けられたウイルソン株に着いた。ウイルソン株の前で写真を取って写真の後ろに見える木の穴の中に入って行った。中で上を眺めれば位置にしたがってハート模様の小さな穴を見られる。木の穴の中に入るのも良かったのにまたかわいいハートまで。ここを後にして最終の目的地である縄文杉を向けてまた登った。ウイルソン株から約2時間歩いた後、ついに夢に描いた縄文杉に会った。言葉をもっては表現できないほど崇高な姿態で私を待っていた。生まれてからそんなにでかい木を見たこともないし、まるで動いているように見える木は初めだった。屋久島の木の中で最大規模で推定年は2千年から7千年の間である生きている歴史と呼ばれる縄文杉。最初はいつ会えるかなと思って大変なけぶりをしたがむしろ会ってからこそ逆に会わなかったら良かったかと思った。なぜならもし今まで縄文杉が発見されなかったらこの木はもっと元気に生きることができるかも知れないという考えをしたからだ。観光というのは人間のために行われる行為だから自然との関係は仕方ない。でも、色んな考えをさせてくれた縄文杉に会ったのは心から感謝している。

屋久島?! これからは休の島、屋休島に会う

先日の山登りはおおよそ10時間もかかった**巖**しいコースだったがおかげさまで久しぶりに熟眠を取った。残った日程はこの企画書のテーマである「人+木=休、人と木が共存する休の島」を一周することだった。トレッキングの影響で自分の調子を心配したことが無駄になってむしろ力が出た。それでバスの時間に合わせて「ヤクスギ自然観」から「屋久島世界遺産センター」、「屋久島環境文化研修センター」まで一気に行って来た。「屋久島世界遺産センター」では世界に存在する多様な世界遺産を見た。そこで韓国の世界自然遺産である「済州島(チェジュド)」が説明されていることを見つけた。ここに来る前、屋久島と済州島の比較を調べたことがあったのもっと易しく理解した。そして屋久島で山登りをする時、必ず守らなければならない規則であるトイレの使い方を本物で見た。私はエコツアーの一環で自分なりにトイレを我慢することに決めたので山にあるトイレへ行ってなかった。テントの内部であらゆることを解決しなければならない姿が面白かった。

さては運が良くて元の計画どおり中間から永田の方に一周することができた。こうして移動する時、色んな所も訪ったがその中で「ヤクスギランド」と「大川の滝」が一番意外な場所だった。「ヤクスギランド」へ行ったらまるでジャングルのようにスギと植物の王国だった。そして猿たちもたくさんいてアマゾンにいる気がした。あと「大川の滝」は私を驚かしたが口がつぐまれないほどでか過ぎてびっくりした。見れば見るほど心が楽になるし魅力的な所を持っている屋久島で暮したくなった。さらに「屋久島フルーツガーデン」へ行った時は暖かい国みたいな感じが出て不思議な体験だった。私が「人+木=休、人と木が共存する休の島」というタイトルを付けた理由はこの島では車が通う道路まで猿と鹿たちの生息地であるわけだ。バスや車で走る時、よく見える光景は彼らが道路の真ん中で休んでいる姿だった。特に西部林道を通り過ぎる時にはバスがなくて車にしか移動できないのにほとんど時速20km以下で走った。そういうわけでこれからは屋久島の別名を「休の島、屋休島」で呼んでもいいんじゃないか。

この「日本体験コンテスト」のおかげでやっと私の夢に身近に行って本当に嬉しかった。もしこういうチャンスがなかったら屋久島で大切な出会いもなかったし私の夢を心にだけ抱いたかも知れない。8日間、屋久島で本物の自然の一部になった。私が今まで探した自分なりの価値観をこの島で見つけるかとは思わなかった。何のために生きていたのか、何のために生きているのかを明らかに学んで来た。自然のまま保存させている美しい島、その島に協力できたことは山で、ヤクスギランドで、白谷雲水峡でご協力金を出したことやなるべく足で、バスで移動したことが全部だったけど環境を尊敬する心を貰って来たのは誇りにしている。これからは夢に向かって迷わずに屋久島で学んだ生きている地球の生物の尊厳性を守るつもりだ。

改めて卒業の前、将来について悩んでいた私に大事な体験をさせて下さった財団法人共立国際交流奨学財団側に心から感謝している。屋久島で出会ってある方が教えて下さった日本語の中で「一期一会」という言葉が思い出す。「一期一会」とは「一生に一度しか来ない出会いあるいは機会」である。そうだったら私は今回のチャンスを自分の「一期一会」として生きて行きたい。







日本の「ソフト・パワー」は、これから世界をリードできるのか？

～東京国際映画祭を中心とした「韓流」と「日流」の比較分析～

林 允熙（イン・ユンヒィ）

＊旅に出るのに、その先に進んで

日本の映画は一番早めにヨーロッパやアメリカなどの国へアジアの映画として認識を深めさせた国であり、その代表的な監督には「羅生門」と「七人の侍」の黒澤明がいる。今までもまだ洋にはアジアを代表する監督としてこの黒澤明を覚えてる人がずいぶたくさん残ってる。しかし、その後の日本映画界は世代交代の時を逃してだんだん褪せる間、ハリウッド映画に惚れてしまった若い観客達はますます日本映画から背を向ける、悪循環になってしまった。結局国家次元によってアニメを世界的で競争力ある文化コンテンツとして育てるし、お金や人材もその方で集まって、フォトブレイ、つまり劇映画は力を失うようになったことである。でも、日本の映画は死んだわけではない、むしろまた生き返る準備をしてる。その根本になる物が筆者がこの度日本へ向かう理由の「ソフト・パワー」と言うことである。

怪談や800万に至る日本の様々な御神とその昔話、世界一の読書率と言われる日本の数知れぬ本中の話々、それこそがまだ使われない宝物、日本映画をまた動かす力であると筆者は思っている。

筆者は現在の日本映画の世界中の現住所、「ソフト・パワー」と名付けた物が映画で生まれ変わる場所、そしてただ今現場で映画を産み出す人々のことを体験する。更に多いコンテンツに付いて体験したいと思ったので関西の「東映太秦映画村」「手塚治虫記念館」を外し、代わりに大分へ向かい、ゲストとして「長湯日韓短編映画祭」に参加することにした。

1. 東京国際映画祭（TIFF）2010

東京国際映画祭とすれば日本最大の映画の祭典であり、日本で唯一の国際映画製作者連盟公認の国際映画23回目を迎える東京国際映画祭(以下TIFF)は、日本唯一の国際映画製作者連盟（世界の映画産業、国際映画祭の諸問題を改善、検討する国際機関（本部：パリ：世界22ヵ国が加盟））公認の国際映画祭として、1985年より開催され、日本の映画産業、文化振興に大きな足跡を残してきた。映画祭の妙味とすると他では見られない世界の秀作を集結し、観覧できることである。新たな才能からベテランの監督までを対象に、世界中から厳選されたハイクオリティなプレミアム作品群より「東京 サクラ グランプリ」を選出する[コンペティション]のほか、日本未公開のエンタテインメント作品が集う[特別招待作品]、TIFF最多の作品数と観客数を誇る[アジアの風]、バラエティに富んだ日本映画を海外へ発信していく[日本映画・ある視点]、「自然と人間との共生」をテーマにした特集上映[natural TIFF]など様々なジャンルの作品を9日間で一挙に上映する内から選び見れることが一番楽しみであった。さらに映画を核とした多目的イベントを実施されていた。開幕日に、六本木けやき坂通りでは豪華ゲストによるグリーンカーペットを実施。これを皮切りに、野外スペースである六本木ヒルズアリーナでは屋外上映やボイスオーバー上映、ゲストを招いたトークショーなどを開催。カフェスペースを兼ねたTIFFムービーカフェでは、公開記者会見など映画ファンならずとも楽しめる多彩な企画が目白押しだった。先言ったグリーンカーペットと言うことが本人には少し珍しく見えて、ボランティアさんにその意味を聞いてみた。「地球環境」を考える映画祭へ「エコロジー」というテーマに沿って、今年も昨年に引き続きグリーンカーペットを敷設することになって、また全上

映でのグリーン電力の使用や環境についてのカンファレンスを開催、“TOYOTA Earth Grand Prix”の選定など、地球環境がいかに大切かを映画祭の場を通して発信しているとする説明であった。

コンペティションの2点、特別招待作品の6点以外にも「日本映画・ある視点」とするセクションがあつて色々な日本映画を見れるし、「白夜行」など筆者の思う通り本や物語りが原作である映画もよく見付けられた。

(写真1 グリーンカーペットの上でゲストになった気持で)

(写真2, 3, 4 第23回東京国際映画祭の街頭宣伝)

(写真5 上映作の指定官、TOHOシネマズ 六本木ヒルズ)

(写真6 自分が観覧した映画のチケット)

2. 日本の映画が生まれる場所

世界的の目で見れば日本の映画とするとアニメは落として話せない物である。珍しいことはそのアニメの「実写版」と言う物をよく見つけられる。アニメを劇映画の形で変わる事に過ぎないが、こういうことは原作が根強い日本だからこそ発展できる話だと思う。そもそもアニメも漫画と言う原作を動ける絵で変える物、つまり原作のストーリーが良いし、その上に日本の民族性という固い忠義を持つファン、お宅という形で見えるマニアから支えられて「実写版」で生まれることになる。

1956年、作画・仕上げから撮影、録音、編集まであらゆる当時の最新設備を備えた日本初の本格的なアニメーションのスタジオとして東映社が生まれた。それから「東洋のディズニー」を目指し、日本アニメを今の成功に導いてきた東映社。名実共に日本、いや東洋で最大最新のアニメーション製作の拠点である。筆者や筆者の両親にも慣れる「銀河鉄道999」「キューティーハニー」「ドラゴンボール」「美少女戦士セーラームーン」、さらに最新作「ワンピース」などに至るまで、幾多のヒット作が生み出され続けてきた。現在でも、年間250本を越えるアニメーション作品がこのスタジオから誕生し、劇場やテレビで活躍しているとする。

(写真7, 8 東映アニメーションギャラリー門鑑)

(写真9, 10, 11, 12, 13 東映アニメーションギャラリー外面と内部)

東映社が漫画に基づくテレビのアニメやその劇場版、アニメの大量生産を始めたら、ジブリは宮崎駿という監督の個人的なスタジオとすることもできる。日本アニメの芸術性、極めて日本的な感性を世界的な共感を得る物として愛される彼の腕はジブリを世界人が東京旅行する時必ず立ち寄る名所になることにした。「風の谷のナウシカ」「天空の城ラピュタ」「となりのトトロ」などの最高とするし

かない作品のフィギュアやセット、製作原理や過程も詳しく調べることができた。言葉ままの“動いてる絵”の1フレームにはいくつの絵がかかるのか、CGをするため先に立てる行く事には何があるのかなどもっと

専門的な話も聞くことができた。

(写真14, 15, 16, 17 ジブリ美術官への道)

(写真18, 19 ジブリ美術館チケットと「天空の城ラピュタ」の巨兵ロボット)

(写真20, 21, 22, 23, 24 ジブリ美術館) 映画セットが撮影の以後にも映画村の形で残ってる場合はほとん

ど時代劇のセットであることだ。

庄内映画村オープンセットは広い大地の上、漁村と農村、宿場町、山間集落のエリアで分かれ、それぞれの村の特性を見せるセットになっていた。韓国にもなれる映画「おくりびと」や「座頭市」もこのセットで撮影した作品である。ただセットだけではないし、いろりを囲んで昔から伝わる民話を庄内弁でたっぷりと聞かせてくれる「昔語りの御爺さん」や寸劇などで時代劇気分を盛り上げる「庄内藩殺陣乃会」、庄内にちなんだオリジナル作品を手作りの人形で演じる「人形劇団・狐美里一座」など直に体験できるイベントもたくさんある。

(写真25 庄内映画村行き鶴岡市レトロバス)

(写真26 庄内映画村の地図)

(写真27 昔語りの御爺さん)

(写真28, 29, 30, 31, 32, 33, 34 庄内映画村)

(写真35 庄内藩殺陣乃会)

他の所に比べてバンダイ・ミュージアムは映画やアニメよりおもちゃ会社らしくフィギュア、特にガンダム

ムだけのために立てたガンダムミュージアムとする方が正しいと思う。それでこそでっかいガンダムだけが

めてももの慰めだった。

(写真36, 37, 38, 39, 40 バンダイ・ミュージアム)

3. 日本の映画を作られる方々「長湯日韓短編映画祭」

筆者がこの度の予定を変更した理由は、他ならぬこの映画祭のゲストとして参加するべきである。正直に言えば東京のミュージアムから見学はもう良いではないかとする気がすることもあるが、筆者がここから先へ進んで行くために計画した体験旅行として、後で得られる物がもっと多いほうが良いと思う。さらにここまで日本映画の歴史や過去の事、もうできた事を見てきたので、ただ今現場で日本映画を引いて行く人の声も聞きたくなるのである。

「日韓短編映画祭」は韓国と日本の映画の交流のために開催される意義である。監督や役者だけのお祭りに過ぎないよその映画祭とは違い、この「日韓短編映画祭」は映画を学ぶ学生や新人達もともに楽しめる映画祭である。

筆者はこの映画祭で望みの通り、現在の日本映画界のお方々と会えることができた。

橘 剛史(映像監督、福岡県 行橋市)さんは今年5月、「釜山国際短編映画祭」のオープニング上映に抜てきされるなど、その活躍ぶりが注目されている。さらに今年7月には、釜山で知り合った筆者を主演に、新作「ダイエットのうた」を撮影。この映画は、福岡インディペンデント映画祭(福岡市、9月10～12日)で上映された。一方、橘さんらの活動を支援してきた「福岡インディペンデント映画祭」の代表である西谷 郁さん(熊本県立大学非常勤講師、アジア映画史)とも話せる機会があった。西谷さんには映画祭で、福岡と釜山の映像交流などについて話してもらった。交流を深めになる気がした。

この通り、国は別々だが同じ物が好きで興味を持って頑張っている人々と似てたり違ったりする悩

みを持って一緒に考えられたこの所で筆者は理論から感じられない大切な事が分かった気がする。

(写真41, 42, 43, 44, 45, 46, 47) __*終りに

日本映画の根本、筆者の言葉で「ソフト・パワー」。筆者が話しようとしたこの物は比喩的に言えば、日本の作家、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）さんが言った「日本人の笑顔」と言うものと思いをした。日本人の笑顔とするものはただの感情を表すことの上、長い間の骨折りを足場として完成できた、日本人の礼儀の一種である。笑顔は楽しい時や嬉しい時などの明るい瞬間に似合うものだが、日本人の笑顔はむしろ悲しみや辛い、きつい時に見られるので、沈黙の言葉と読んでる人もいる。ある人はこれについて日本人は嫌われたくないので本音を隠すだけと言ったり、日本人の言葉には本音と建前があるから素直にならないと言ったりする。確かに異人の目ではずいぶんおかしいと思われるかも知らないし、慌てる人もいるはずだ。だが、現代時代の一番大変な問題と言われてる現大人の憂鬱を救えるものがまさにこの日本人の笑顔、ソフト・パワーではないのかと思うところだ。

日本映画の静かなる原動力、ミニシアターを巡る紀行

金帝坤(キム・ジェゴン)

日本の「ミニシアター」との最初の出会

2009年、九州のある大学院で交換学生として留学生生活をしていたある日、研究室の友達が想田和弘監督の「精神」という映画を見に行こうと誘ってくれた。当時、その地域で「精神」を上映しているのは下町にある小さな映画館だけだった。しかし、その映画館に入ったとたん、私が以前から描いてきたような映画館だと強く感じた。それが、日本のミニシアターと出会った初めての瞬間だった。私は、帰国して日本のミニシアターについてもっと深く知ろうと思い、日本の友達に頼んでミニシアターについてまとめた本を入手し、勉強しはじめた。日本各地で様々な形のミニシアターが存在していることが分かり、自分が夢中になれる何かを見つけたような気がした。自然に、今度日本に行く時にはミニシアターをテーマにする旅行をしようと思った。漠然と夢のような旅行の計画を立てていたところ、偶然な機会に国立国際交流奨学財団の日本体験コンテストが行われることを分かったときには、ミニシアターとの特別な縁を感じた。ありがたいことに応募に受かり、思ったより早く本格的なミニシアター紀行を準備することになった。しかし、日本旅行コンテストに受かった後、直ちに就業が決まり、ミニシアター旅行は日程を縮小せざるを得ない状況となった。それに伴い、残念ながら広島や九州地域まで廻ろうとしていた当初の計画を東京と大阪だけにその範囲を狭めた。東京ではミニシアターが密集されてある渋谷を集中的に見物することにした。大阪は地域で名高い「第7芸術劇場」と「シネ・ヌーヴォ」だけに行くことにした。旅行にせめて4泊5日の日程は必要だと思い、韓国の旧正月の連休を活用した。劇場の移動に配慮し、いつ、どの地域のシアターでどのような映画を見るのか、インタビューはどのような人にするかを計画した。確かなテーマを持った旅行準備は何よりも楽しかった。

最新トレンドを感じたいなら渋谷へ行くこと、そしてミニシアターに行くこと

渋谷は東京の文化の発信地であり、文化の中心地と言っても良い。これを象徴するように、渋谷駅の前スクランブル交差点は多くの人々が同時に道を渡る場所としてマスコミによく登場する。そのような情報もあって、自分自身はそのような風景に慣れていると思っていたが、実際にそこに立つと大都市特有の活力と多様性を短い瞬間に感じる事ができた。何より渋谷は、若者たちが多く利用するショッピングモールとデパート、文化コンテンツの商店等が密集している場所である。日本について分かるようになってから、渋谷の隅々は私の目を奪う魅力に溢れた場所であり、文化的に何かを消費し、享受している感覚を明確に与えるところであった。

羽田空港に着いたのは夜の12時を少し過ぎで、渋谷には午前1時に着いた。どうせ5、6時間しか寝れないと思ったら遅い時刻にわざわざホテルに泊る必要はないと思った。次の日の宿泊先を調べるために渋谷の路地隅々を2時間くらい歩き回ると、一晩のうちに渋谷の有名なミニシアターたちをいくつも通り過ぎていた。お洒落なミニシアターを見ると翌日（実際は当日）の本格的な日程が楽しみになってきた。

2日目の朝、夜明けに見て置いたミニシアターを地図に頼らずに向かった。日常をしばらく忘れた旅行客の余裕というものもあり、道探しに夢中になって地図ばかりに頼るには道を歩いている人と通りが魅力的過ぎる。今度の旅行で訪れた初ミニシアターは「シネマライズ」であった。平日の午前、映画館を尋ねるには少し早い時間とも思われる9時にも4、5人がチケットを買うために並んでいた。ちょうどその日の夕方には、2009年に韓国で話題になったヤン・イクゼン監督の「息もできない」のアンコール上映が予定されていた。予想外にミニシアターでの韓国映画との遭遇は嬉しかった。映画館に立ち入ると若さが感じられる場所である渋谷のミニシアターらしく内部はおしゃれな感じを与えてくれた。荒いコンクリート感が漂うの天井と壁には視覚を刺激するような設置美術品が展示されていた。物品を売る陳列台には日本特有の可愛らしく小綺麗かつ素朴な配置が目をつけた。営業の準備をしていたス

スタッフにここはどのような人々が主に訪問し、どんな映画たちが上映されるのか、営業は難しいのかなどを尋ねた。スタッフは質問に親切に答えてくれた。渋谷の中でも中心の中心に位置しているので映画館を尋ねる人は若い大学生から中・高年層まで多様なようであった。作品によって観客数は流動的なようで、運営にもそれほど困っていないようであった。「シネマライズ」を出て次に向った所は「Bunkamuraル・シネマ」であった。「Bunkamura」という大きい建物に入ると各種の公演を案内するチラシとポスターが備えられ、1階には軽洋食とコーヒーを注文できるレストランがある。その両側には美術作品を展示するギャラリーがある。その他にも建物の中にはクラシック公演を含めたたくさんの公演と展示を行っている複合スペースがある。印象的だったのは「Bunkamura」の品格を一貫して保つため、映画館のラインナップが海外の巨匠の作品で飾られていることであった。すなわち、ここに来ると、作品性を検証済みの名作が必ず見られるという信頼を与えるのである。映画館の入口には、その間上映したリストを容易に調べられるように自体製作したパンフレットを記念品として販売している。そこから上映作に対する愛情とプライドが自然に感じられる。ここでも働いているスタッフと会話を交わした(訪問したすべての映画館のスタッフたちと話した)。そして映画館の中をゆっくり見回した。余裕があったら一日中、映画館でのんびり過ごしたいと思わせるほどの空間であった。しかし、他の映画館も見なければならぬため、次の映画館である「シアターN渋谷」に向った。一本の作品を見る予定もあったためいつの間にか心が忙しくなっていた。「本屋さんみたいな映画館」というコンセプトの「シアターN渋谷」は正直にあまり本屋さんのような感じはしなかった。映画館の隅に映画関係の書棚があるのが全てであった。しかし、すぐ近くに大学があり、下の階にはアニメショップがあるせいで、前の「Bunkamura」とは違いインデーズ文化が好きな若者をターゲットにしている映画館の感じがした。映画には満足した。作品そのものもよかったが、韓国ではめったに接しにくい日本の独立映画を楽しんだという満足感がもっと大きかった。次の日程は、渋谷から少し離れている青山通りに位置する「イメージフォーラム」に訪れることであった。「イメージフォーラム」は今度の日程を合わせて個人的に一番気に入った映画館である。周辺の雰囲気も気に入ったし、ラインナップもしっかりと企画した作品が多かった。内部インテリアも芸術的な空間らしい感じを与えてくれた。それで勇気を出して事務室にノックをした。親切に迎えてくださったスタッフ(黒小さん)と1時間ほど「イメージフォーラム」の戦略をはじめたくさんの話をさせてもらった(文部省と韓国の文化部和連携した映画祭も行うなどの経歴と実力のある映画館であった)。渋谷にミニシアターが密集しているのに命脈を維持しているのは、それぞれ映画館が自分なりの観客層と個性を明確に分かりやすくし、様々な戦略を駆使しているからだということが分った。その後は、イメージフォーラムに背を向け、大阪に行く深夜バスに乗るために急いで新宿に向った。

大阪の地域性と自由なスピリットが一つになっている二つのシアター

実を言うと、大阪で訪れた二つの映画館は「映画館作り」という本を通じて事前調査をしていた。地域の人々の募金と寄付によって運営されている「第7芸術劇場」(「ナナゲイ」とも言う)と何回もの危機を経て運営が正常化になった「シネ・ヌーボ」のバックストーリーは、地域においてどのような形でミニシアターが運営されるべきかというヒントを与えてくれた。地方の文化関連の公共機関で働いている私としては、大阪のミニシアターたちが抱えている悩みを聞いたかったし、共有したかった。「シネヌーボ」には、午前の早い時刻に着いたため運営スタッフと話し合う機会はなかったが、「第7芸術劇場」では映画館の支配人である松村さんと直接話し合う機会が得られた。会話を交わすうちに、単に大阪のミニシアターたちの悩みだけではなく、東京と日本全国のミニシアターの悩みと映画を通じて社会に意味のある貢献をするための様々な努力を聞いているとあっと言う間に一時間が過ぎていた。映画館を出る前に、松村さんの写真撮影をお願いした。実は一緒に撮りたかったが、少し恥ずかしくなりそれは辞めた。さようならと挨拶をしながら、これからナナゲイには気軽に何回も訪問できるという感じがした。映画館の前にあるお好み焼き屋さんで食べたお好み焼きも物凄

く美味しく感じられた。

日本のソフトパワーと映画、そしてミニシアター

最後の日程のために大阪から東京に戻ってきた。山の手線に沿って新宿にある「K'sシネマ」と神田の「岩波ホール」などを廻りながら、最初に計画したより一つの映画館でとどまる時間がだんだん長くなっていた。紀行中にミニシアター以外のどんな日程も追加することができなかった。余裕があれば、東京で留学中の友達にも会いたいと思っていたが、今度の旅行の目的を充実にするため、夜になると一日にミニシアターを振り返りながら感じた個人的なことを記録することで時間を費やした。特に、下北沢にある「短編映画館トリウッド」の代表である大槻さんと交わした話は私自分を刺激し、多くのことを学んだ。大槻さんは、時々自分が直接映画を製作したり、中野区にある別のミニシアターの二つの映画館を運営されている方であった。私は、ついあまりにもうらやますぎて「私が叶えたい夢を大槻さんは二つも実現していっちゃいますね」と言わざるを得なかった。映画というジャンルと映画館というスペースが好きでたまらない私は、自作の映画を自分が運営する映画館で上映するという理想をずいぶん前から抱いていたのである。映画監督と映画館の代表は同時に成すことは大変なことなので一つでも成し遂げられたら満足できている。日本映画を勉強しようと留学したことは映画監督になろうと選択したからであった。しかし、留学中に得た最も大きい教訓は、「ソフトパワー」と言われる日本の文化コンテンツの多様性と自由さを体験したこと、また細分化されたマーケット、人々の文化的態度に感心した経験である。そして、今度の旅行を通じて体験できたミニシアターは、日本文化が持つ「誇らしいダウィッド」であると同時に、独特の文化的態度が凝縮されたミニスペースだと分かった。マイナーなコンテンツに対する収容とこれを単純にエンターテインメントだけではなく、自分のライフスタイルと同一視しようとする積極的な姿勢、小さいパンフレットでも大事にする心が日本のミニシアターを今の魅力的な空間に作り上げたのだと感じた。



シネマライズで朝から並んでる人々。



ホッとする空間のBunkamuraル・シネマ内部



イメージフォーラムの素敵な外観。



映画ポスターが貼られているイメージフォーラムの壁の前で。



住宅地に位置されているシネ・ヌーボ。シネフィルたちの内緒な集結地みたい。



シネヌーボの内部。映画チラシをたくさん用意されていた。



第7芸術劇場の内部。観客が思ったより多かった。



第7芸術劇場の支配人である松村さん。日本のミニシアターについて有益な話をしてくださった。



ギャラリーのような感じがしたおしゃれなK'sシネマ。



下北沢「短編映画館トリウッド」の内部。赤と黄色の配色がモダンな感じを与えていた。



岩波ホールの玄関。中・高年層向けの映画を上映していた。



渋谷駅の有名なスクランブル交差点。ここにいると何となくドキドキする。